

国際理解・異文化理解 - 「教職実践演習」のヒトコマ

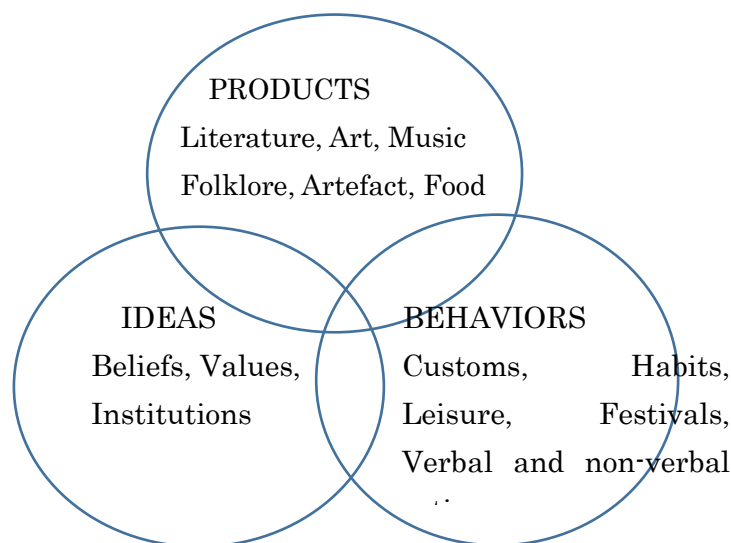
夫 明美

筆者が担当する短大の「教職実践演習」では、短大の 2 年生が教育実習を経た「総仕上げ」の位置づけで以下の 3 点に焦点を当てて授業を展開しています。

1. 生徒理解
2. 学級運営・学校運営
3. 国際理解・異文化理解

本稿では、授業内で扱う理論的な枠組みについて端的に紹介いたします。文部科学省が定める外国語教育の目標の中に、国際理解・異文化理解という表現があります。

文化というと、具体的な事物や行事など「形として」見えやすい側面と、さらに抽象的なレベルでの「アイデア」や「価値観」の側面があります。これらの側面を玉ねぎ型で表したモデル(Hofstede, Hofstede & Minkov, 2010)や、島で表したモデル(八代他, 2005)、3つの輪で表したモデル(Tomalin and Stempleski, 1993)がありますが、授業内では、3つのサークルモデルを紹介します。どのモデルもカテゴリー分けは似ていますが、サークルモデルの利点は、それぞれの要素が互いに関連しあっていることが一見して明らかです。



例えば、認定教科書の「One World 1」では、日本のお節料理が写真入りで紹介されて

いますが、それぞれの「料理」に込められている「いわれ」や「願い」についての言及はありません。もちろん、中学生が英語でそのような説明を理解することは非常に難しいことではありますが、教材研究をする際や、補助教材を作成する際に、「IDEAS」「BEHAVIORS」の部分は重要な要素になると思います。たとえば、過去の受講生に「3つのサークルモデルを使用して、本レッスンの内容をさらに充実させる」という課題を課したところ、お節料理の品々に込められた願いや縁起等について詳しい記述を付加できました。また、「他の国や地域の文化との比較対象で、補助教材を探す」という追加課題については、日本の年賀状とキリスト教文化圏のクリスマスカードの比較という興味深い観点を得ることができました。年賀状、カードによく見られる定型表現（言語）、好まれる色やモチーフについて観察し、それらの背後にある「IDEAS」や「BEHAVIORS」について調べることで、単なる表層的な「カタチ」の提示に留まらない授業へと展開していけるように思います。また、教師自身が「cultural awareness」(Tomalin and Stempleski, 1993)を磨くことで、言語・外国語教師としての資質を向上させることが出来ると思います。

参考文献

Hofstede, G., Hofstede, G., & Minkov, M. (2010). *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. McGraw-Hill.

Tomalin, B., & Stempleski, S. (1993). *Cultural Awareness*. Oxford University Press: Oxford.

八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子（2005）「異文化トレーニング」三省社
One World English Course 1 教育出版

（ふ あけみ 准教授／教員養成センター）
